上空から北へ向かって見た風間浦村。

蛇浦（へびうら）――。下北半島の北端、風間浦（かざまうら）村の北部にその集落はある。迫りくる山と海に挟まれたわずかな土地に家々が肩を寄せ合っている。その名の通り道は激しく蛇行している。その昔、この地の住民たちは「蛇浦」と呼ぶことを避けていた。蛇は海の神様である龍神様の使者であり、神聖なものとして崇められ、〝忌み言葉〟として口にしなかったのである。

悠久の海

午前4時40分、眼前に大きな月が現れたが、一つ、二つとカーブを曲がるうちに滑り落ちるように山に沈んでしまった。5時、4人の男を乗せた船が港を出る。防波堤では黒い海鵜が羽を休ませている。頭上ではカモメがケア、ケア、ケアと鳴く。真っ赤な太陽が水平線から姿を現すと、波は朝日に照らされて青色に、黒色に、銀色にと色を変えながら輝く。光を乱反射させ、砕け散る波粒までもが美しい。右手には大きく湾曲する下北半島が尻屋崎まで続いている。左手には雄大な北海道の姿がはっきりと見える。船は速度を上げた。ガタン、ガタンと大きな音とともに船底が海に叩きつけられる。舵を取るのは木下清さん（39）。甲板に仁王立ちになり、微動だにしない。風にたなびくカッパとハンドルを動かす手元を見なければ、まるで静止画のようだ。

ポイントに着くと、男たちは膝をつき、身体を大きく海に乗り出した。全身の体重をかけて網を引き、引き揚げた網を膝で押さえ込む。ようやく網の先端まで獲物を追い込むと、清さんは箱メガネで網を覗き込んだ。二人に網を押さえさせたまま、彼は網の中にタモを差し込んで「ウッ」と力を込めて持ち上げる。バシャーッという音とともに半透明のヤリイカがカゴに入る。最後の抵抗と言わんばかりに、イカはビュウウッと墨を吹き出す。カゴが満杯になると、

1.木下清さん。ピンク色のカッパを着たら大漁したため、以降ゲン担ぎとして全身ピンクでコーディネートしている。
2.岩についたマツモという海藻を採る村人たち。布海苔やマツモなどの海藻は、今も昔も村にとって重要な収入源の一つである。
3.木下さんの父・尚さん。77歳で船頭を務める。

父・尚（ひさし）さん（77）が船底の倉庫にイカを流し込む。清さんは時折「フーッ」と大きな息を吐きながら、30回も40回もこれを繰り返した。船には大きな巻き上げ機もクレーンもない。漁獲量は毎年乱高下するため、大きな機械には投資をしないのだ。この日は2時間の漁で840kgものヤリイカを獲った。今年は4年ぶりの大漁だという。高く上がった太陽はいつの間にか分厚い雲に隠れてしまった。北風が吹き始め、体感温度はさらに下がる。波が高くなってきたので、イカ漁の後に予定していたアンコウ漁は中止となった。船が大きく揺れ、尚さんは派手に頭から海水を被ったが、顔色一つ変えず、水をぬぐいもしない。黒い風呂敷で頭を覆い、赤い鉢巻を締めている。赤く焼けた頬。大昔からさほど変わっていないであろう船上での営みと彼の風貌に、この地の歴史に思いを馳せずにはいられない。